

令和8年2月20日

大山町議会議長 吉原 美智恵 様

大山町議会 広報常任委員会 委員長 浅田 龍太郎

令和7年大山町議会議員研修報告書

1	研 修 名	広報常任委員会 行政視察
2	日 時	令和8年2月17日（火）～18日（水）
3	参 加 者	浅田龍太郎、小林直哉、池田幸恵、西本憲人、近藤隆博、京力久子
4	内 容	1, アドミュージアム東京（公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団） 視察 2, 東京インタープレイ 視察 3, 令和7年度町村議会広報クリニック 研修
5	目 的	議会広報の質的向上を図り、広告・広報の歴史的変遷と最新動向を学ぶとともに、専門家による広報クリニックを通じて本町議会だよりの改善点を客観的に検証し、今後の編集方針に反映させる
6	研修結果 又は概要 （意見・感想）	1, アドミュージアム東京 日本広告史および世界の広告コミュニケーション事例について研修を受けた ○主な学び ①広告は時代を映す鏡であること ・江戸期の商法から戦後テレビCM、インターネット時代の双方向型広告へと進化 ・現代は「Purpose（存在意義）」や「DE&I（多様性・公平性・包摂性/受容）」が重視される時代 ②一方通行から参加型へ ・SNS時代は受け手がメディア化 ・共感・参加・対話が重要 ③社会課題との接続 ・環境問題、情報リテラシー、AI活用など、広告は社会性を帯びている 本町議会広報への示唆 ・広報は単なる「記録」ではなく 「意図を持った伝達」を意識するべき ・読者に問いかける構成の重要性 ・目的を明確にした編集方針の必要性 ○所感 広告の歴史は単なる商業活動の変遷ではなく、「社会との対話の変化」であることを強く実感した。江戸期の看板や引き札から、現代のAI活用や参加型コミュニケーションへと進化する過程は、情報発信が常に“受け手との関係性”によって形作られてきたことを示している。 講師からは、広報は「掲載した事実」ではなく「伝わった成果」で評価されるべき



との指摘があった。この言葉は、議会広報の在り方を改めて考えさせるものであった。

本町議会だよりにおいても、議事の記録的要素に偏るのではなく、町民に何を持ち帰ってもらいたいのか、どの論点を理解してほしいのかを意識した紙面設計が必要であると感じた。広告史の学びは、議会広報の本質を再確認する機会となった。

今後、受け手に取って議会広報の多すぎる情報をどう削ぎ落とし整理するのか、他広告媒体へ分散等を含め、委員会内で精査していきたい。

2. 東京インタープレイ

議会 ICT 化と住民公開の取り組みについて研修を受けた

○主な内容

- ・SideBooks の運用改善
- ・本棚形式での議案・資料公開
- ・投票モジュール導入事例
- ・地域本棚（無料）による議会だより公開

○意見交換

- ・検索性、ナビゲーションの制約
- ・PDF テキスト抽出の精度問題
- ・有料公開サービスの費用対効果
- ・高齢者への操作配慮



○所感

ICT を活用した議会運営および情報公開の実例を学び、議会活動の透明性向上には「仕組み」と「運用設計」の両輪が不可欠であると認識した。

SideBooks は単なる文書閲覧システムではなく、議会内部の効率化と住民公開の双方を見据えたプラットフォームである。一方で、検索性や費用対効果、利用者層への配慮、文書閲覧システム以外のプラットフォーム活用の少なさなど、導入にあたっては慎重な検討も必要であると感じた。

印象的であったのは、無料の「地域本棚」を活用し議会だよりを公開している自治体事例である。本町においても、紙媒体とデジタル媒体を補完関係に置きながら、議会広報の発信を行っているが、公開手法については今後検討余地があると感じた。

ICT 化は目的ではなく手段であり、住民理解の促進という本質を見失わないことが重要であると改めて認識した。

3. 令和 7 年度町村議会広報クリニック

事前に各議会だよりを読み込み、「読む→正す→活かす」の流れで意見交換を実施。

○横断的な指摘事項

① 見出しの改善

- ・「～について」の多用は避ける
- ・鉄則として見出しは本文から切り出す

② 差別化の明確化

- ・町広報との違いを明確に
- ・議会の「チェック機能」「論点」「賛否」を可視化

③ 一般質問比率の再検討



		・特集・企画ページの充実 ・読み物としての構成強化 ④ データの見せ方 ・グラフや金額に「何が読み取れるか」の短文解説を付す ⑤ 読者参加 ・若年層への直接配布 ・アンケートの工夫 ・QR 活用の段階的導入 ○大山町議会への指摘 ・「～について」見出しの多用 ・ウェブアンケート回答数の少なさ ○所感 本クリニックは、単なる講評ではなく「読む→正す→活かす」という実践型の研修であり、他自治体の事例を通して自らの広報を客観視できる研修であった。 特に本町においては「議会のチェック機能の明確化」について、議会として何をどう検証したのかという部分についての課題があると感じた。 現代において一般質問中心の構成から、特集や論点整理型への転換を図る動きは全国的な潮流であり、本町においても編集方針の再検討が求められる。常に改善を行い、広報常任委員会として継続的に検証・改善を行う体制づくりが重要であると強く認識した。
--	--	--